

論文審査の結果の要旨

氏名 ジョコ アディアント

途上国都市におけるスラム形成は経済成長下の過渡的な現象と思われてきたが、スラムは一向に解消する気配をみせていない。インドネシアでは、植民地時代の先住民集住地にルーツを持つカンポンが都市化に吸収され、スラム化しているところが多い。中心部カンポン地区は、仕事へのアクセスがよく生活費がかからないことから、経済水準の低い人たちを引き寄せている。しかし、カンポン集住地は減る傾向にあり、今日も存続しているところは高密度化し、劣悪な環境の問題が深刻化している。政府は、環境の劣化した集住地の立退きを強行する一方、土地登記を促し、建築・都市計画規制を徹底しようとしてきたが、改善への道筋を見出せていない。

そこで本研究は、カンポン集住地において、自治が存在し、土地、家内経済活動を含む「家」、建築ルールについて、住人たちが独自のコードを持っている点に着目し、それらを尊重し活かしたカンポンの環境改善の方向性を論じている。具体的には、ジャカルタ首都特別州 5 市のうちの中心部に位置する中央ジャカルタ市に残るカンポンであるチキニを対象とし、見えにくいコードの実態に迫っている。その所見は下記のとおりまとめられる。

第1章では、都市カンポン問題の背景となっている論点を、分野横断的な既往研究レビューに基づいて整理している。そして、ターナーの住居の自力建設の有用性・正当性の考え方に立脚し、目的を提示している。また、当事者の協力を得るために、コミュニティ活動と研究調査を組み合わせるなど、独自の研究方法を示している。

第2章では、ジャカルタのカンポンがどのように生まれ、今日的状況になっていったのか、植民地時代に遡って歴史を概観した上で、対象地チキニ地区においてカンポン自治が確立し独自のコードを今日まで運用し続けてきた必然の経緯を明らかにした。

第3章から第5章では、チキニにおいてカンポン自治で運用されている3つのコードを取り上げた。

第3章は、「土地保有の確実性 **land tenure security**」に関するコードについてである。調査の結果、大半の人が、国の土地登記にはよらないが、カンポンに暮らし続けられる独自の保有の確実性を獲得していた。前者が「客体的 **objective**」なのに対して後者は「主體的 **subjective**」な確実性である。また、都市開発が進行中のジャカルタ中心部にあって、コミュニティ内承認にとどまらず、土地取引の証拠や外部団体など多様な承認のかたちを取り込み、土地保有の主體的確実性が補強されていることを指摘している。

第4章では、まず、カンポン集住地における「家内小事業 **Home-Based Enterprise/HBE**」の実態（HBE 従事割合、業種、資金など）を整理している。「家」に関するコードは、個人による生産活動と再生産活動の両面を持ち、コミュニティとの関係性で規定される複雑なものであることを明らかにした。一般に、HBE による収入増加で住環境改

善が期待されているが、本調査から、「家」は家内経済活動と不可分であるため HBE に優先投資される傾向にあり、住環境改善に直結しないことがわかった。

第5章では、「不文律の建築ルール Unwritten Building Shared Rules/UBSR」についてのカンポンコードの存在を探った。政府による建築規制が現実的でないカンポンにおいて、災害を防止し社会的に近隣調停することで一定程度の環境を担保する UBSR が存在している。UBSR は、工事見習いを通して、結果的に周知されていることを調査結果から示している。

第6章では、第3章から第5章で、3つの側面から取り上げたカンポンコードを総合的に考察している。

1974年以降カンポン居住者は法的に認知され政治的に権利を有するようになった。他方、独自のコードによるカンポン自治については、政府が存在を認識しているものの、承認には至っていない。政府がカンポンコードを承認して政府側のコードに取り込もうとすると、カンポン自治をかえって脅かしかねない。将来に向けてコミュニティによるカンポンの自力改善を期待するのであれば、政府側が既存のカンポンコードを未承認のまま認識して尊重すること (unacknowledged recognition)、すなわち、「暗黙の自治 autonomy anonymous」の方向性があると結論づけている。

以上の研究成果は、カンポンを市場や政府の制度に取り込むフォーマル化の限界を直視した上で、自力建設・改善に過度に期待したインフォーマリティ礼賛に陥らず、「暗黙の自治」という方向性を具体的なフィールド調査から見出してしており、インフォーマリティ（現行制度外）という焦眉の都市課題をめぐる世界的議論に対して、示唆に富み、価値ある寄与が認められる。

したがって、博士（環境学）の学位を授与できると認める。

(以上 2,000 字)